様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ９ 月 ２９ 日現在

機関番号：３２６１４
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｈ０２７０５

研究課題名（和文）言葉の教育における円滑な幼小接続を実現する系統的かつ互恵的な実践モデルの開発

研究課題名（英文）Development of Systematic and Reciprocal Practices for a Smooth Transition in Language Education

研究代表者
吉永　安里（Yoshinaga, Asato）

國學院大學・人間開発学部・准教授

研究者番号：５０７１４７２１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　6,930,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、幼稚園と小学校における教師の言葉の指導を、同一教材、長期的変容、文化差の３つの観点から多面的に分析し、言葉の指導に関する円滑な幼小接続の指導方略を検討した。その結果、幼児期と小学校期の言葉の指導には、物的環境などの非言語的言語的指導にも、教師の発問などの言語的指導においても差異と共通性が見られ、発達に応じた連続性のある指導がなされていることが明らかとなった。また、文化によってその連続性のあり方には差異があり、それぞれの長短があることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
近年、幼小接続が世界各国で注目を浴びているが、OECD(2017)は各国の幼小の教育の間には教育課程の連続性、互いの教育への理解，教育方法の連続性などに課題があり，改善されはいるものの依然として問題があると指摘する。また日本における幼小接続研究や実践は，小学校教育への適応を目的とした実践報告や幼小どちらか一方を取り上げた研究が多いことが指摘されている。このため、幼小双方を研究対象とし，それぞれの特徴を明らかにした上でその接続の方略を検討し、幼小の系統性と双方の互恵性を重視した幼小接続の方略を明らかにし，国内外に論文・書籍・学会発表・教育現場への発信を行った本研究の学術的、社会的意義は大きい。

研究成果の概要（英文）：In this research, we analysed language instructions between Early Childhood Education(ECE) and primary school education from three perspectives: (1) the same material, (2) Long-term transformation, and (3) Cultural differences, and proposed language instructional strategies for a smooth transition. As a result, there are differences and commonalities in language instructions between ECE and primary school education, both in non-verbal instructions such as physical environment and in linguistic instructions such as questioning by teachers, those differences and commonalities enable continuous instructions. In addition, Differences with continuity and pros and cons with transitions were found in each culture.

研究分野：幼小接続

キーワード：幼小接続　言葉　同一教材　長期的変容　多文化

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９，Ｆ－１９－１，Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（１）幼小接続研究の歴史的背景

近年，急激に進みつつある社会の高度情報化，共働き家庭の増加，少子化の進行などによる教育ニーズが多様化している。子どもたちを取り巻く社会状況も戦後の 6-3-3 制が制定された時代から大きく変化し，「小 1 プロブレム」と言われる小学校 1 年生の不適応の問題が 1990 年代後半からクローズアップされ始めた。一方，1989 年改訂の小学校学習指導要領では，子どもの主体的な遊びを大切にする幼児教育からの連続的な学びを保障するため，直接的な体験を重視する生活科を創設した。幼小の円滑な接続は，社会の変化に伴う子どもたちの小学校教育への移行の難しさと，幼児教育で培われた子どもたちの力を小学校へ引き継ぎ一層伸ばそうとする２つの潮流の中で高まっていった。

（２）近年の幼小接続の動向

当初は，幼児教育の保育者と小学校の教師が互いを知るために，同じ研修を受けたり，互いの実践を見合ったり，あるいは幼保小交流会のように幼小の子ども同士が互いに知り合ったり，幼児が小学校という場や文化に慣れることを目的とした交流が多く見られた。次第に，学びの連続性に配慮した接続カリキュラムの開発が行われるようになっていった。しかし，依然として幼小には教育課程の構成原理に違いがあり，教育課程の接続が十分ではないことが指摘されており，2017 年に幼児教育教育要領，保育所保育指針，幼保連携型認定こども園教育・保育要領と小学校学習指導要領が改定され，幼小の円滑な接続が一層強調された。特に，小学校学習指導要領解説総則には，小学校入学当初の幼児教育との円滑なつながりをもたせるためのスタートカリキュラムの策定が明記され，幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた子どもが主体性を発揮できる小学校側の指導の工夫が求められるようになった。

２．研究の目的

本研究は，幼小の円滑な接続を実現する指導の具体策を示すことを目的とした。これまでの研究では，幼小のどちらか一方を取り上げたもの，幼児と児童の交流，教師間の交流や相互理解を研究対象とするものが多く，教育課程に関する取り組みの具体的方策を示しているものが少ない。また，幼小を比較した研究も，指針・要領・指導案，教材の比較などの資料研究に留まっている。そこで，本研究では，実際の教育実践を観察対象とし，幼小それぞれの指導の特徴を明らかにすること，そしてその差異や共通性から，幼小の指導を連続的なもととするための方途を提言することを目的とする。対象とする実践事例については，あらゆる学習の基盤となり，幼小共にその育成が喫緊の課題となっている言語能力育成の核となる領域と教科，すなわち，幼児教育においては領域「言葉」，そして小学校においては国語科を選定することとした。幼小の言葉の指導は，「一次的ことば」「二次的ことば」という言語発達の特性に応じた差異があり，その差異が乗り越え難い不連続性となって，幼小の円滑な接続を阻む要因の一つとなってきたことが先行研究において指摘されている。一方で，幼児期から小学校以降の読みをつなぐものとして，絵本の読み聞かせが重要な役割を果たすとする研究成果もある。

そこで，本研究は，幼児教育では絵本の読み聞かせ場面，また小学校ではこれに相当する授業として読みの授業場面を取り上げ，幼児教育と小学校教育の言葉の指導の円滑な接続，特に学校教育である幼児教育と小学校の教師の読むことの指導に焦点をあて，幼小の指導の差異と共通性を明らかにすることを目的とする。幼小指導の連続的なあり方を検討するにあたっては，①同一教材において幼小でどのような指導の差異や共通性が見られるのか，②幼児期後半から小学校の１年間の指導がどのように長期的に変容していくのか，さらに，③他国と日本の幼小の指導の差異と共通性を比較し，日本の幼小接続の特徴と課題はどこにあるのか，3 つの観点から検討することとする。

３．研究の方法

本研究は，幼児教育においては絵本の読み聞かせ場面，また小学校においてはこれに相当する読みの授業場面を取り上げ，学校教育である幼児教育と小学校における読むことの指導の円滑な接続を図るカリキュラムの策定を，同一教材，長期的な変容，多文化比較の３つの観点から検討した。

具体的な方法としては，実践場面をビデオ撮影し，トランスクリプトデータについて教師と子どもの発言をそれぞれカテゴリーに分類し，そのカテゴリーの幼小での差異と共通性を解釈的・記述的に分析をする。その分析から，幼小の子どもの読みの力がどのように芽生え，どのような発問によって指導されているかを考察し，子どもの読みの発達に即したカリキュラムの提言を行った。

４．研究成果

幼小教師の指導を，発問や規範指導などに見られる読みの指導内容と，教師と子どもの位置関係や教材・教具などの物的・空間的環境構成の両面から分析を行った。

（１）同一教材における幼小の読みの指導の差異と共通性

同一教材においては，教師の発問や子どもからの文章内容に関する気づきや問いのパターン，また種類に差異と共通性があること，また共同注意のあり方に差異と共通性があることが示唆された。たとえば，教師と子どものやりとりについて，幼児教育では，子どもの問い・気づきが

主体的に発言され，そこから他の子どもや教師が応答する子どもの主体的発話と相互交流が起こっている一方，小学校では子どもからの主体的発話がほぼ見られなかった。小学校では子どもの挙手なしの発言に対し，教師から厳しい規範が指導されることもあり，求められるやりとりの差異が子どもの戸惑いの要因になる可能性があることが示唆された。一方，小学校においても読み聞かせによって読みの指導が行われた場合，授業の中で子どもの問い・気づきが多く見られた。読み聞かせのように教師と子どもが互いに近い位置での読みの指導を行なうことにより，子どもの問い・気づきを生かした主体的な読みの指導が可能となると考えられる。また，読みの指導内容に関して，自覚性，指導範囲，系統性の３つの視点から連続性ある指導を考えることが重要であることも示唆された。

①自覚性

１点目の自覚性であるが，読み聞かせを無自覚に楽しむ幼児教育に対し，小学校では子ども自身が目的を自覚し，その目的に到達するため自覚的に物語を読む経験をする。こうした「無自覚的な読み」から「自覚的な読み」への転換を促す発問を小学校接続期に取り入れていくことで，子どもが自身の成長を実感し，主体的に「自覚的な読み」に移行することができると考えられる。

②指導範囲

２点目に，指導範囲であるが，子どもの問いや気づきには幼小で差異が少なく，幼児期に読みの力の芽生えがあることが窺えた。教師の発問は小学校で種類が多様化し，また発問数も増えることが示唆された。幼小共通の発問もあり，そうし

た幼児教育での読みの指導内容は小学校につながっていくと考えられるが，小学校で急に指導範囲を拡張するのではなく，幼児教育でも小学校の教師の発問に相当する子どもの問い・気づきが観察されているため，子どもの読みの力の芽生えに応じて，幼児期から読みの指導範囲を系統的に拡張していくことも必要であることが窺えた。

③系統性

３点目の系統性については，幼小共通する発問であっても，幼児教育と小学校では発問の難易度に差があることが示唆された。また，指導範囲の拡張も難易度を上げることになると考えられる。こうした発問の難易度や指導範囲を子どもの読みの力の実態に即して段階的に引き上げていくことで，読みの指導内容に系統性をもたせることも重要であると言える。幼児教育の読み聞かせにおいては，目的に合わせ多様な読み方を許容すると共に，子どもの読みの力の芽生えに関しても，その他の資質能力と同様，子どもの実態に即して，指導を段階的に引き上げていく意識をもつことが求められる。

（２）幼小の読みの指導の長期的変容

現在，分析中。

（３）多文化比較における幼小の読みの指導の差異と共通性

多文化比較においては，日本・アメリカ・ベルギー・イギリスの４か国の比較をおこなった。日本とは異なる教育観，教育制度や教育課程をもつアメリカ・イギリスとベルギーの３か国と比較した。３か国は，幼小接続の在り方にそれぞれ日本とは異なる特徴を有する。日本は一部の学校園を除いて幼小の教育施設は分離しており，幼児教育は子ども中心で遊びを通した全人格的な学びを追求する立場にあり，小学校教育は学習内容の系統性や教師主導の教授法を重視する立場をとっている。一方，アメリカ，イギリス，ベルギーは多くの幼小が同じ敷地内に併設されている。しかし，ベルギーの幼小の教育観はそれぞれ日本と同様であり，アメリカ，イギリスの就学前の幼児教育施設は日本，ベルギーとは異なり学校教育のレディネスを求める傾向にある。アメリカのキンダーガーデンは義務教育にもなっている。また，イギリスは，小学校が他の３か国より１年早く開始され，その前年に小学校就学に向けたレセプションクラスがあることが特徴である。

日本は幼小の指導内容や環境構成に差異が他の３か国よりも大きいことが明らかとなった。アメリカやイギリスは指導内容も環境構成も共通性が多く，連続性があることは示唆された。また，ベルギーも環境構成は幼小で差異が大きいものの，指導内容に関しては幼児教育から段階的に引き上げられているような工夫がなされていた。この３か国では，幼児教育からフォニックスによる系統的な言語指導がなされ，読みの指導事項が日本と比較するとより高度で焦点化した言語指導，読解指導となっていることが窺えた。

日本の幼小接続の特徴として，環境構成の面では幼児教育は教師と子ども同士が近い距離にあり，小学校になると遠くなるというベルギーとの共通性が見られた。また，活動目的としては物語の内容理解に焦点があるという点でアメリカとの共通性があった。しかし，日本の幼児教育は活動の目的・方法が明示されない点，音声言語のみが指導の対象となっている点，挙手指名もないため規範指導が非常に少ない点が他国の幼小どちらとも異なっていた。日本の幼児教育の読み聞かせの目的は，友達や先生と物語を楽しんだり，想像を広げたり，生活とのつながりを意識させたりすることにあり，子どもにとっては目的的，自覚的な読みではなく，読み聞かせを楽しむ中で無自覚のうちに目的が達成されるように仕向けられていた。また，他の３か国と異なり文字言語の指導や挙手指名についての規範の指導が少ない点も特徴であった。一方，小学校では，教師と子ども同士の位置が遠く，個別のテキストでの学習となり，物理的な共同注意が生じにくい環境構成であった。また，日本の小学校では日直や子ども同士で規範指導を相互に行う場面も観察され，この点は他の３か国には見られない子ども集団の自己制御を求める日本の規範指導の特徴が示唆された。また，小学校１年生の読みの指導内容は幼児教育との差異が少なく，幼児

期の読みの指導を生かした，小学校段階への系統的な読みの指導のあり方が課題であると考えられる。

（４）今後の日本の読みの指導における幼小接続の方策

こうした日本の幼小接続の在り方の改善の方策として，幼小をつなぐ実践において，幼児教育の中で小学校教育につながる資質・能力の芽生えを引き延ばしたり，小学校低学年の教育に幼児教育の指導方法を部分的に取り入れたりすることが，幼小相互の教育を尊重しながらつなぐ一つの方法となると考えられる。

たとえば，幼児教育において絵本を単にお話を想像を広げて楽しむ，先生や友達と絵本を楽しむということも大切にしつつ，時には子どもの実態を踏まえて自覚的に読む時間を設けることも可能だろう。また，小学校においても段階を踏んでより高度な読みの力をつけるために，アメリカやイギリスのように絵本の読み聞かせの方法を取り入れながらもより高度な読みの指導内容を示したり，教師と子どもたちが近くに集まって子ども同士，教師と一体感や安心感を得られる関係性の中で学んだりする学習環境の構成の工夫が必要であると考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 吉永 安里	４．巻 60
２．論文標題 幼小の読みの指導の差異性と共通性	５．発行年 2018年
３．雑誌名 読書科学	６．最初と最後の頁 138～155
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.19011/sor.60.3_138	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 藤森 裕治	４．巻 60
２．論文標題 学校文化としての読むこと	５．発行年 2018年
３．雑誌名 読書科学	６．最初と最後の頁 156～172
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.19011/sor.60.3_156	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 藤森裕治・吉永安里	４．巻 61（2）
２．論文標題 社会的行為としての絵本読み聞かせ	５．発行年 2019年
３．雑誌名 読書科学	６．最初と最後の頁 64~76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.19011/sor.61.2_64	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 岡本 拡子，吉永 安里	４．巻 16
２．論文標題 ドイツおよびベルギーの多文化教育実践	５．発行年 2019年
３．雑誌名 健康福祉研究 ： 高崎健康福祉大学総合福祉研究所紀要	６．最初と最後の頁 13-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://id.ndl.go.jp/bib/030000475	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 吉永 安里，岡本 拡子	4．巻 11
2．論文標題 幼児期の教育から小学校教育への言語指導の円滑な接続に関する一考察 ： ベルギー・フランダースのフレネ教育の実践から	5．発行年 2019年
3．雑誌名 國學院大學人間開発学研究	6．最初と最後の頁 57-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://id.ndl.go.jp/bib/030312364	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　0件／うち国際学会　5件）

1．発表者名 吉永安里
2．発表標題 イギリスの幼小接続の取り組み―言葉の教育とその評価―
3．学会等名 日本保育学会第71回宮城大会 研究発表要旨集p. 699
4．発表年 2018年

1．発表者名 藤森裕治・吉永安里
2．発表標題 幼小接続における ことばの教育 日・英の事例研究を通して
3．学会等名 第134回全国大学国語教育学会大阪大会　研究発表要旨集pp.47-50.
4．発表年 2018年

1．発表者名 Yuji Fujimori・Asato Yoshinaga
2．発表標題 A smooth transition from ECE to elementary school education (ESE) focused on literacy education: Through a comparative case study between Japan and the UK
3．学会等名 28th European Early Childhood Education Research Association Conference (Budapest)（国際学会）
4．発表年 2018年

１．発表者名 Asato Yoshinaga・Yuji Fujimori
２．発表標題 A Smooth Transition from ECE to PSE Focused on Literacy Education : Through a Comparative Case Study of Japan and the UK
３．学会等名 21st European Conference on Literacy(Copenhagen)（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Asato Yoshinaga
２．発表標題 How can we achieve smooth transition from ECE to CSE? : An international comparative study of Language Education and the Assessment
３．学会等名 29th Europe Early Childhood Education Research Association Conference(Thessaloniki)（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 吉永安里
２．発表標題 幼小連携の国際比較―ベルギー・アメリカの実践から―
３．学会等名 日本保育学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 Asato Yoshinaga
２．発表標題 Comparison of teaching strategies in reading instruction: An examination of the transition from ECE to CSE in Japan, Belgium and the U.S.
３．学会等名 20th European Conference on Literacy 2017(Madrid)（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Asato Yoshinaga
２．発表標題 A cross-cultural study on language education practices for smooth transition from ECE to CSE: Comparison between Belgium, US, and Japan
３．学会等名 27th Europe Early Childhood Education Research Association Conference(Bologna)（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計10件

１．著者名 無藤隆、内田千春、神長美津子、北野幸子、古賀松香、中坪史典、掘越紀香、松嵜洋子、横山真貴子、深田昭三、吉永安里他	４．発行年 2018年
２．出版社 ぎょうせい	５．総ページ数 246
３．書名 育てたい子どもの姿とこれからの保育	

１．著者名 無藤隆、岩立京子、神長美津子、古賀松香、津金美智子、清水益治、矢　藤誠慈郎、吉永安里他	４．発行年 2018年
２．出版社 東洋館出版社	５．総ページ数 164
３．書名 幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿	

１．著者名 岩﨑 淳（著，編集），木下 ひさし（著，編集），中村 敦雄（著，編集），山室 和也（著，編集），坂本 喜代子（著），宮前 嘉則（著），樺山 敏郎（著），丹生 裕一（著），河野 順子（著），幸田 国広（著），吉永安里（著），佐内 信之（著），神部 秀一（著），渡辺 通子（著），稲井 達也（著），大貫 眞弘（著）	４．発行年 2018年
２．出版社 学文社	５．総ページ数 152
３．書名 言語活動中心 国語概説:小学校教師を目指す人のために	

1．著者名 白川 佳子（編集），福丸 由佳（編集），児童育成協会（監修），吉永安里他（著）	4．発行年 2019年
2．出版社 中央法規	5．総ページ数 191
3．書名 子ども家庭支援の心理学（新・基本保育シリーズ）	

1．著者名 藤森裕治	4．発行年 2018年
2．出版社 明治図書出版	5．総ページ数 201
3．書名 学力観を問い直す：国語科の資質・能力と見方・考え方	

1．著者名 岩﨑淳・木下ひさし・中村敦雄・吉永安里他	4．発行年 2018年
2．出版社 学文社	5．総ページ数 143
3．書名 言語活動中心 国語概説－小学校教師をめざす人のために－	

1．著者名 全国大学国語教育学会・吉永安里他	4．発行年 2019年
2．出版社 東洋館出版社	5．総ページ数 204
3．書名 小学校国語科教育研究	

１．著者名 岡本拡子・花原幹夫・汐見稔幸（編著）・吉永安里他（著）	４．発行年 2019年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 258
３．書名 保育内容「表現」	

１．著者名 渡邉英則・大豆生田啓友（編著）・吉永安里他（著）	４．発行年 2019年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 240
３．書名 保育内容総論	

１．著者名 田澤里喜・吉永安里（編著）	４．発行年 2019年
２．出版社 世界文化社	５．総ページ数 112
３．書名 あそびの中の学びが未来を開く 幼児教育から小学校教育への接続	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	藤森　裕治 (Fujimori Yuji) (00313817)	信州大学・学術研究院教育学系・教授 (13601)	